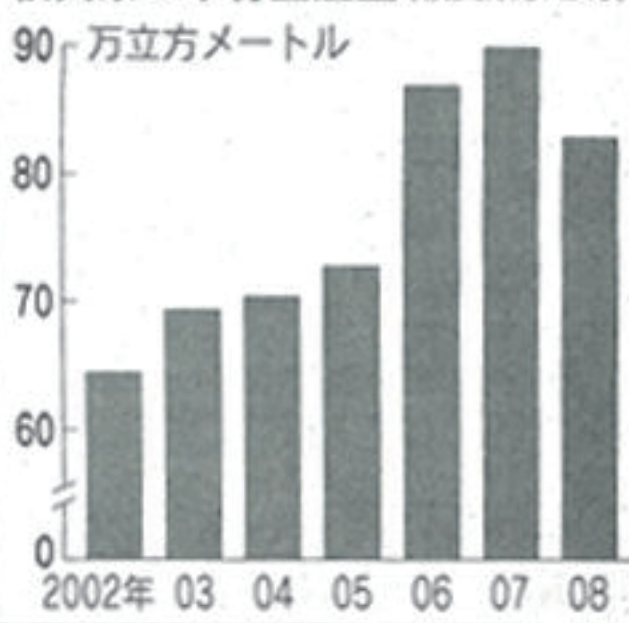


秋田産木材 復権へ一丸

秋田県の木材生産量(秋田県まとめ)



した。昨年度から国が木材自給率の向上策を打ち出していることもあり、「輸入材から国産材に需要がシフトし始めている」(県林業木材産業課)とみて、秋田スギなど県産材の復権を目指す。

秋田県内で県産木材の消費拡大策が加速している。秋田市内の企業が木製玩具を通じて、地元の木材に愛着を持ってもらおうという事業を開始。能代地区では複数の企業が木製品の規格統一に乗り出

地元で広がる消費拡大策



ワークショップでは大型パズルを用いる

秋田市内では「木育」計画

「木育」という聞き慣れないプロジェクトが秋田市内で動き始めている。1・2区四方の木製子どもなどに秋田産の木材の「ファン」を増やし、人形やパズルなどの商品の需要増につなげようとしている。

の性質などについて知ってもらおうという試みだ。木育などの活動を通じて県産材を使った木製品の「ファン」を増やし、人形やパズルなどの商品の需要増につなげようとしている。

第1弾。パズルに

仕掛け人は木製玩具の企画・販売を手掛けるワークス・ギルド・ジャパ

ン(秋田市)のデザイナー、大野英憲さんと3DCGなどの映像やキャラクターの制作会社、フォチューナ(同)の八木沢栄治社長。異業種交流会で知り合った両氏は互いの分野を生かして何か秋

製品規格統一の動きも

田をテーマにした活動が年度に規格を統一した木材できないかと模索し、昨年8月に「秋田木育プロジェクト」を立ち上げた。

商品の第1弾としてすでに30区四方の木製パズル「MOPA」を開発した。秋田スギをメインに使い、幾何学模様のデザインに仕上げ、室内オブジェとしても使える商品として売り込む。今後はフォチューナが制作したキャラクター「なまはげワールド」の木製人形などに取り組む予定。ワークスの大野さんは「プロジェクトはまず2社で始めたが、タイアップの幅を広げていきたい。活動が県産材の良さを見直すきっかけになれば」と話す。

ただ、需要が低迷していた国産材に変化が訪れている。国は20年までに木材自給率を50%に引き上げるという「森林・林業再生プラン」をスタート。住宅着工の回復傾向もあり、大都市の戸建て住宅に国産材を採用する住宅メーカーが増加し、スギやヒノキの現在の取引価格は14年ぶりの高値をつけている。

能代地区では100を超す木材関連の事業所があるが、多くは小規模業者。大口需要に対応できず、ビジネスチャンスを見逃す機会も少なくなかった。同市の木材製品出荷額は08年で約185億円と、この30年で60%近く減少している。

こうした流れを受け、秋田県も来年度から支援策に乗り出す。農林漁業向けに創設した100億円の基金などを活用。集材メーカー向けの原料供給工場の設立や製材業者向けの助成などを実施し、「産業の活性化を図りたい」(林業木材産業課)としている。木材産業の復活はなるのか。この2、3年が勝負の時だ。

木材産業が盛んな能代地区では能代商工会議所が中心となり、2012

銘木(能代市)の網幸太社長は「協業体制を築き、木材産地としての復活につなげたい」と話す。

東奔北走

国産材が高値

秋田県の木材生産量は

08年で82万8000立方メートルと全国5位。ただこの20年で30%減少している。